

議 事 概 要 書

会議名称	令和6年度 第3回社会教育委員会会議（臨時会）及び教育委員との懇談
日 時	令和6年11月27日（水）視察：午後13時30分～午後3時10分 会議：午後 3時30分～午後5時00分
場 所	会議：伊那市役所 501会議室 / 視察：伊那地区
出席者	伊那市社会教育委員：社会教育委員10名 教育委員：4名 事務局：教育長、教育次長、学校教育課長、生涯学習課長、学校教育課補佐、生涯学習係長、公民館係長、社会教育指導員、担当
議 題	下記のとおり
議 事 内 容	
1 開会（教育次長） 2 あいさつ 教育長：日頃より、教育委員・社会教育委員の皆様には市教育行政に関わっていただき感謝申し上げます。また、先日の上伊那社会教育関係者懇談会では、皆様と交流・意見交換をさせていただきまして、本当に貴重な機会をいただいた。 本日の懇談は二部構成になっており、第一部は報告となる。社会教育委員の皆さんがご多用の中、参加していただいている各種イベントの報告。これは市報の中でもコラムとして掲載させていただいているもの。本日はその報告から、課題や成果を共有できたらと思う。 第二部は懇談となるが、テーマを「おとなの社会教育」としている。市においても生涯学習課に関わる各種企画講座に関わらず、市・各部署において企画する講座へ、もう少し男性に参加してほしいと感じることが多い。内閣府の調査でも特に一人暮らしの男性が地域から孤立しやすい傾向にあるという結果が出ている。その割に60歳以上の中で地域活動（ボランティア）に積極的に参加したいと考えている割合は、女性よりも男性に多い。また、介護予防に関する取り組みとしては、サロンや介護予防教室などの多様化に、なかなか男性の利用が進まず、多くの通いの場の利用の大半が女性であるという。これは男性が社会とのつながりが希薄で、社会活動の参加に乏しい人が多いのではないかというような警鐘が鳴らされている方もいる。孤独を生み、健康状態の悪化・自殺・孤独死を招きやすいと考えられている。 先日の社教懇で、総がかりというキーワードが出された。不登校・引きこもりに限らず、孤独・孤立に至らなくても人の繋がりにくさを感じるひとは多いのではないかと考える。私たちを取り巻く社会もコミュニティが大きく変容してSNSに代表されるようにネット社会に大きく針が振れている。対面のコミュニケーションや電話も使用しない、文字だけや非言語コミュニケーションになって人間関係が非常に希薄になっている。そう考えたときに、社会教育が果たす役割は増しているのではないかと考える。みんなで総がかりで取り組んでこれからの社会教育をどういう形	

にしていったらいいのかを、本日の会で意見交換をしたり、アイディアを出せたらいいと思う。

会長：今年もあと一か月余りとなり、天気予報では雪マークが出始め冬の到来を感じる。

先日の上伊那社会教育関係者懇談会では、大変お世話になった。不登校支援や多様な学びについて、それぞれの立場から率直な意見が交わされたことと思う。先ほど社会教育委員は「我がまちいいところ10選」として、小沢にある西天竜発電所を視察してきた。そしてこれからは、ご多用の中お越しいただいた教育委員の皆様と「おとなの社会教育」というテーマで懇談が行われる。

「不登校支援」「施設見学」「おとなの社会教育」この3つを一本の線でつなぐことは少々難しい面もある。それだけ社会教育・生涯学習は多岐にわたり、すそ野が広いと言える。だから私自身『何をどうして行ったらよいか』戸惑うことが多々ある。他の社会教育委員も日頃の悩みや課題をお持ちかと思われる。

今日は、教育委員の皆様と現状や課題を共有するとともに、率直な思いやアドバイスをいただくことを通して、今後の社会教育委員の活動に生かしていきたいと考えている。

3 自己紹介

教育委員⇒社会教育委員⇒事務局の順に自己紹介

4 令和6年度社会教育委員の実践活動について（進行：会長）

○イベント等参加報告、地域の話（各委員から報告）

- ・歴博講座「軍事郵便は語る」
- ・武田信玄富県地区狼煙上げリレー
- ・森の音楽祭in春近郷
- ・伊那フィル鹿嶺高原コンサート
- ・伊那市人権同和教育講座講演会
- ・「美術館・歴史博物館・創造館」特別講座 第5講座「山に育まれて」

5 懇談（進行：会長）

「おとなの社会教育について」

（生涯学習係長・公民館係長からテーマの趣旨説明）

<懇談>

委員：脳いきいき講座についていくつかお尋ねしたい。内容・どんなことをやっているか。また、それを公民館などに拡大していくことは可能なのか。

係長：管理栄養士・歯科衛生士・音楽療法・体操講師などと呼んでそれぞれに行っている。コースも108コースある。実際の様子は見ていないが、多くのコースがあるので、お試しなどもできるかもしれない。基本的には社協に委託してやっているので公民館に広げると、今回意見をいただいたことを担当課へ投げかけして様子を見ていくことはできると思われる。

委員：趣旨説明から、男性が孤立しやすい状況・女性の方がコミュニケーションを良くとっているなどのデータみたいなものはありますか。

係長：参加者数までしかデータとしてはないが、担当部署では、女性の中に男性が入っていきにくい傾向があるなど、感じられることは多々あるようである。

委員：自分の親も高齢というところになってきていて、脳いきもある日を境に行かなくなった。自分の中で高齢になればどこかのタイミングで離脱するというものだと思う。どこまでを社会教育の方として考えるのか、対象年齢というのが昔は60歳定年でその後を考えたときに人生まだまだやれると思えたが、今では地域の役員決めで65歳でもみんなバリバリ働いているので役員などいろいろできませんという。生活するのに一生懸命で、男性は特に家計を支えるために外に出ることはあるが、65歳までの方が自分の余暇のために外に出るということは結構厳しくなっているという背景がある。これからますます人口が減ってくると、70歳までは現役社会と言われてくるので、その辺と社会教育をどうリンクしていくのかということは考えていかななくてはならない。また、講座は受け身のものが圧倒的に多い。インプットとアウトプットのバランスを考えたときに、受けたものを発表することでいきいきできることもある。今まで得てきたキャリアでインプットさせてもらいながらアウトプット7割くらいの活動であれば出ていくという流れもあるかもしれない。

委員：高遠町のおいさんずくらは公民館で立ち上げたものではなく、自分たちで立ち上げ企画運営していく人が集まってできた。公民館主体ではなく、自分たちが主体となっており、その中の一つでボランティアの時間として高遠小学校の周りをきれいにしようとボランティアをしたり、楽しみの時間として諏訪までお酒を飲みに電車に乗って行く。自分たちで企画して運営していくことで、公民館の主事さんが主になって企画するわけでもない。逆にそこに乗っかっていくことで主事の負担も減っていくのではないかなと思う。ただ、音頭を取る人が高齢なので、なかなか難しいが、楽しそうな活動をしているので、婦人会がその活動にのらせてほしいというほどになった。高齢者の活動となると、民生児童委員の活動にもなってきたしまい、1人暮らしの方などに対して社会教育なのかと思う。

委員：昨年まで移動販売をしていたが、お客さんの中には今日脳いきいきがあるとか聞くが、平日の日中の活動ということで、男性だと野良をしている人も多い。女性はお茶したり仲間であることを好むところがあるが、男は一人でいいかなあというところがあるので、それも要因の一つかなと思う。おとなの社会教育、どうやって男性を引き込むかという話だが、そうした関心の持てる事業があればいいが、いきなり引き込むことは難しいのかなと思う。

委員：自身の周りを見てみると、女性の向学心が多いと感じられることが多い。全国的に見ても女性の方が集まりなどに参加しやすいと言われている。社会に貢献するというおとなとしての社会教育がなされて、子どものために交通整理でもなんでもいいのでやったことで皆さんに貢献していると認識づける必要があるのかなあを考える。そうしないと、草刈りでもなんでもいいが、やれることを元気なうちに社会に対して貢献していくという気持ちを持つことを何らかの形で実践できるよう自分は動いている。

委員：60歳定年で地元に戻ってきて、何らかの形で地元に関わったほうが良いと思い、公民館

の活動に参加している。十数名いる中で、70過ぎている自分が一番若い。皆勤賞取っていた先輩方が、年を重ねてだんだん出席人数が減ってきているのが現状となっている。そうしたことも踏まえ、ジェンダーレスということで男性の会・女性の会の垣根を取っ払って、会そのものは残し自由に行き来していいとなっているが、男性の会に女性は参加するが、女性の会の催しには男性は出たことがないというのが実態となっている。男性の参加を増やすには、本人のやりがいがないと難しいことなのかもしれない。ボランティアに参加することで、少しでも役に立っているのかなと思うとやりがいにつながってくるのかもしれない。

委員：今日の会から、求められているものが3つあると思う。1つ目は男性の孤立を防ぐという予防・介護。2つ目は市民大学のように情報を得る・学び・インプット。3つ目は貢献したい人の場所としてアウトプット・自己実現。予防介護・学び・自己実現と3つあるとすると、予防介護は社会教育の領域なのかと考えることもあるが、今やっていることも継続すればいいが、インプットとなると得られない情報を得るとなると今は様々な情報にあふれているので、余程伊那の地域の歴史とかに関心がないと、仕方がないのかなと思う。無理に男性を増やそうとすることで、マレットやゴルフといったそれが悪いというわけではないが、自分たちでやればいいし、人を集めるために景品を豪華にするなど目的とずれてきてしまうのは違うことかと思う。自己実現では、地域に貢献したい人がいて、実際の事例もあるということはそこに期待もできる。社会教育でやるべきかどうかは分からないが、主事の方がどうすれば人が来るだろうかと考えるのではなく、予算が与えられている中で誰か先生になれる人を募集して、良い内容だったら予算を付けて、人が集まらないようだったらやらないというような企画自体を主事から公募するようなこともあっていいかと思う。人口も減っていく中で、ただ受け身で話を聞くのではなく、どんどん働いてもらう。そういう場に来るということが、こうした場にはいない男性にしてほしいことかと思う。

委員：自分も男性しかいない祭りの会に所属しているが、昔の方のほうが体のづくりが頑丈で今は割と軟弱になってきているので、60歳過ぎるとお祭りに回れなくなってきている。その会が3世代くらいの構成で目的意識をもってぐるぐる回る。リタイヤしても忘年会や新年会に顔を出しワイワイやれる所属感のある男性の集まりというのが、数多くあって選択できるようになると、社会とつながるきっかけがでてくると思う。年齢も職業も関係なく、地域のつながりで地域の人たちが喜ぶ何かをやる。公民館主導ではなくて地域密着型で地域が喜ぶ何かに紐づけれるような形になっていくと、外から継続的にエネルギーをかけたりとか何かするということに苦勞しなくても、出たい・つながりたい・知ってもらいたいというものにどう導いていくきっかけを作るかということにエネルギーをかけたほうがエネルギーのかけがいがあるかと思う。

教育長：男性に限らず、女性もそうかと思うが、役に立つ自分をいつも感じていたいのだと思う。講座はいつも生徒になる、何かを教わる、というイメージになってしまうので、教える側自分たちで面白く主体的にやっているよという活動を作っていくと、そうした時のアイディアが出たように感じる。最後は一人ぼっちになってしまわないように体が動く

うちに、近くの人と知り合ったり声を掛けあえる地域になっていくことがまず大事と改めて思う。

6 その他

- ・今後の会議等予定について

上伊那地区社会教育委員研修会 → 今年度の開催はなし

第4回社会教育委員会議 令和7年3月中旬

7 閉会（副会長）